

基本理念

「子ども達の生きる力をより豊かに、より強く育むため、たくさんの愛とたくさんの笑顔を注ぎ、子どもが主役となる保育園」

愛育を信条とし、愛情深く子どもと関わることで、子どものコミュニケーション感覚を養います。子ども達の生きる力をより豊かにより強く育むために、たくさんの愛とたくさんの笑顔で子どもが主役となる保育園を目指します。

そのために、「自分もみんなも大切にできる温かい心、優しい心」を育てることを基本方針とし、子どもたちが素直に「ありがとう」と伝えられる感謝の心と平和の心を育みます。互いに尊重し認め合う環境の中で、共に成長し未来を繋いでいきます。

基本的な視点

視点1：子どもの幸せを第一に考える視点

子どもの幸せとは、第一に親や周囲の人間から愛情を受け取り、感じることでありと認識しています。それに伴い、子どもは自然に笑顔を獲得していくはずですが、子どもが笑顔で過ごせるようにするためには、子どもの生理的欲求を満たし、一人ひとりの甘えや欲求を十分に受け止め、信頼関係を築きながら成長を見守るべきだと確信しています。

視点2：すべての子育て家庭を支援する視点

子どもを産んだからと言って、全員が愛情深い親になるとは限りません。なぜなら、親、子ども共に個性があるからです。私は、どのような母親がいてもいいと思っています。子育てに苦手意識がある場合は、得意な者に任せればよいと考えます。そのためにも、保護者が働いていなくても自由に子どもを預けられる場所が必要であり、すべての子育て家庭を支援する園として大切な考え方になるのではないかと思います。

視点4：地域社会等全体で子育てを支える視点

市町村によって、子育てに対する支援内容が異なります。例えば子育て支援金が給付される地域もありますが、子育てにお金はもちろん必要です。当方は、自治体と密な連携をとり、自治体から家庭の支援ができる制度などを適宜紹介するなどして経済状況を間接的に支えることも大切であると考えています。それだけでなく、地域で執り行われる行事などにも積極的に参加し、地域社会全体で子育てを行う意識を拡大していきたいです。

基本目標

基本目標 1 地域における子育ての支援の充実

当方が考える「子育て支援」の最も理想の形は、子育て中の保護者の方が本当に必要としている支援を提供することだと思っています。保護者との関係を密にすることで保護者のニーズを把握することができ、支援の選択肢を増やすことができます。行政的支援が必要な家庭には行政との橋渡しを、保護者の心のケアが必要な場合にはカウンセリングを行うなど、適切な保護者と子どもの状況把握・支援の提供を行うことが目標です。

基本目標 2 親と子の健康の確保と増進

そもそも健康とは、病気などになっていない状態ではなく、心身共に健康で、自発的に何か行動を起こしたい状態であることと認識しております。つまり、身体のみ健康だけでは「健康」とは言えず、心のケアも、とても重要な部分だと考えます。子どもたちの心身状況を良好に保つことは当然のことですが、希望があれば保護者のカウンセリングも実施できる環境を整えることが目標です。

基本目標 3 子どもの成長に資する教育環境の整備

乳幼児にとって最も大切な事は、「基本的信頼・希望・不信」の3つです。まず、乳幼児は与えられたものを不安なく取り入れる事で、自分を信頼するようになり、自分は何でもできるという全能感にひたります。そして乳児期に獲得されるべき人格的活力は「希望」です。希望がしっかりと獲得されれば生涯にわたってさまざまな人間関係の中で出会う信頼と不信の葛藤から立ち直る力をもたらします。そして不信があることで外界への適応を意味し、「泣く」、乗り越える事で「泣きやむ」という一連の仕組みは、人生周期の中で偉大な仕組みとなります。このような確かな保育知識を現場に落とし込み、子どもの発達段階に必要な活動を提供する環境を整えます。

基本目標 4 安全な子育て環境の整備

安全とは、子どもが不用意に怪我を負わないことであり、命が脅かされない状況を指します。そのため、当方は、バリアフリーな環境を作り、施設管理・衛生管理・出欠管理を徹底します。また、基本的にはクラス分けをすることにより、同じ発達段階の子とも達を遊ぶことでトラブルも減り、怪我を負う・負わせるリスクを回避します。一方、クラス分けをせずに活動することも大切にし、年齢の違う子ども同士の間を通し、力の差や能力の差を経験しながら成長を促していきます。

【小規模な保育はきめ細かな保育】

0～2歳児と3歳以上の子どもでは日中の過ごし方も違います。小規模な保育は、基本的に0～2歳児を対象とした保育のため、0～2歳児に特化した保育を行うことができます。また、小規模保育は定員が少なく、一般的な保育所よりも保育スタッフの手厚い人員配置が定められています。そのため、一人ひとりの子どもに保育者の目が届きやすく、きめ細かな保育を期待することができます。子どもの個性を尊重した保育をしたり、子どもの興味にあわせた活動をすることができます。

【アットホームな環境】

小規模な保育では、一般的な保育園よりも子どもの人数が少なく、家庭的な雰囲気の中で保育を受けることができます。保育者の人数も少ないため、子どもと保育者の距離が近く、愛着形成もスムーズな場合が多いです。一人ひとりの子どもが先生全員から見守られて過ごすことができます。特に0～1歳の赤ちゃんの時期には、少人数の家庭的な環境は落ち着きやすいでしょう。

また、小規模な保育では異年齢保育を取り入れている園が多く、0～2歳児が同じ部屋で過ごすことが多いです。子どもたちが兄弟姉妹のように過ごすなかで、年上の子どもが年下の子どもをかわいがったり、年下の子どもが年上の子どもに憧れていろいろなことを真似したりするという場面も生まれます。

保育者と子ども、子ども同士の距離が近く、大きな家のようなアットホームな環境が、小規模保育の魅力のひとつだと考えています。

【先生とのコミュニケーション】

小規模な保育では、通っている子どもの人数が少ないため、先生と保護者のコミュニケーションを密にとることができるという利点もあります。日々の送り迎えで保育園に出入りする保護者の人数も少なく、先生サイドも保護者の顔と名前が一致しやすい。担当以外の先生からも、日々の子どもの様子を聞いたりすることができます。